

経営者の目と保健師の目で 従業員の闘病と就労を支える

藤沢タクシー株式会社 代表取締役 根岸茂登美さん

湘南の中心都市藤沢の地で創業77年を誇る藤沢タクシー株式会社の3代目として陣頭指揮に立つ根岸茂登美社長は保健師というもう一つの顔を持つ。経営者でありながら専門家として従業員の健康を守るための保健活動に力を注ぎ、誰もがいきいきと働き続けられる職場の構築を目指してきた根岸社長が「治療と職業生活の両立支援」へ向けた同社の道のりを語る。

1. 専門性を生かした従業員の健康管理

「祖父から父へと受け継がれたタクシー業ですが、父が体調を崩したこともあり、私がバトンを受けてから16年が過ぎました。大学院の修士課程在籍中に家業を継ぐか看護師の道を進むか決断を迫られ、当時『老年看護学』を学んでいた私にとってはまったく未知の世界へ、結果として足を踏み入れることになりました。それまでは、臨床の看護師や看護学校の教員として看護畑ひとすじに働いてきましたから、経営者としてやっていけるかどうか不安でしたが、何も知らなかったからこそ飛び込めたのかもしれない」と根岸社長は切り出した。

大学院を修了した2001年に社長に就任するが、その翌年、タクシー業界に規制緩和の波が押し寄せ、自由化にともなう新規参入によってタクシー台数が急増、同社も経営的に厳しい状況を迎えた。根岸社長は経営者として会社の窮状に真っ向から取り組むため看護の世界からきっぱり身を引こうと決意した。

「しかし、不思議なもので経営者として全体を見ながらも、何より気になるのは従業員の健康面であり、とりわ

け定期健康診断結果における有所見率の高さに愕然としました。旅客輸送の安全を守るためにも乗務員の健康状態の把握が必要だと考え、産業保健の分野をあらためて勉強し直すことにしました。できることから始めようと、まず安全衛生委員会を立ち上げ、人脈を駆使して新たな産業医と契約しました。産業医には、職場巡視として営業中のタクシーに同乗していただき、乗務員の相談に乗ってもらえる環境を整備しました」。こうして身を引くどころか根岸社長は自分の原点に立ち返ることになる。

2. 心に寄り添う保健指導

「会社の年間目標の中に健康に関する項目を入れることから着手しました。また、有所見者の二次健診受診率を上げるために、再検査の期日を設定し、受診時の医師のコメント欄のある報告書を求めました。その結果、二次健診に応じる従業員が増えてきました。有所見率の高さ同様ショックだったのは喫煙率の高さです。しかし、一気に全社禁煙というのは現実にはとれないと考え、事務所内の禁煙から始めました。一般的に喫煙率の高い業界で、私が社長に就任した当時、喫煙しないのは私一人というような状況の中で禁煙対策に着手したのですから反発も激しかったです。しかし、健康の大切さに気づいてもらおうと、喫煙の害を警鐘する講演会を開き、私自身も健康教育を行いました。時代の流れもあって、2003年に禁煙車両の運行を開始、2007年には全車禁煙車両としましたが、昨年ようやく敷地内禁煙が実現、長い時間を要しました」と根岸社長は苦笑する。



日頃からのコミュニケーションで従業員の健康状態を把握する根岸社長(右)

同社の従業員の平均年齢は61歳(全国平均59歳)で、毎年1歳ずつ引き上がっていった結果、10年前に比べて10歳高くなった。高齢化に伴い健康に関する課題は年々新たに生まれてくる。メタボ対策やメンタル面の問題など数え切れないが、安全を第一とするタクシー会社にとって乗務員の健康がいかに大切か、根岸社長は産業医と連携しながら従業員の健康に対する意識の変革にチャレンジし続けている。定年は60歳でも健康であれば上限なく働くことができる体制のもと、健康で長く働き続けてほしいという根岸社長の熱い思いは従業員の心をゆっくりととらえてきた。

3. 闘病と両立支援の道を拓く

「産業医をはじめ、安全衛生委員会のメンバーの協力で健康に対する従業員の考え方が変わりつつあった2003年に、50代の男性ドライバーに食道がんが見つかりました。当社にとっては初めてのがんの罹患者でした。この人は3年後に亡くなりますが、最後の入院直前まで仕事をしていました。その後相次いで4人のがん罹患者が出るという現実を前にして、がんを患いながら就労すること、あるいはがんを克服して復職することが新たな課題となってきました。

がんというのは常に選択を迫られる病気だと私は思います。例えば、がんが見つかったら、まず病院や治療方法を選択しなければなりませんし、次の段階では治療に専念するのか、働きながら治療することを目指すのか等々、絶えず選択を求められます。大企業ならばマニュアルや制度に照らして対策を進めていけばよいのですが、当社のような中小企業では社内制度の整備も充分ではありません。しかし、中小企業ゆえに従業員との距離は近く、当事者とまっすぐに向かい

合うことが大切だと私は考えました。

がんは仮に部位が同じであっても、ステージの状態はもちろん、本人ががんに打ち勝つ強い気持ちがあるかどうかと、治療を後押ししてくれる周囲の状況などによって全く違ってきます。簡単にマニュアルや制度に当てはめることはできず、私はまず当事者と徹底的に話しあうことにしました。がんに罹患したというような重い事実を話すことは難しいはずで、普段のコミュニケーションがいかに大切か実感しました。健康診断の大腸がん検査で所見があったある従業員は、真っ先に私に相談に来てくれたおかげで、結果が出るまでの気持ちの持ち方や、いざ診断されたときは病院の選択と治療方法や副作用のことなど私の持っている情報をすべて伝えることができ、1人の産業保健スタッフとして治療の見通しなどについても話しましたが、私にはもっと強みがありました。それは経営者という立場です。つまり私がその従業員の就労を保障できるということでした。

がんの治療が始まって本人に継続する意思があれば勤務体制や勤務時間などの配慮によって働くことが可能だと背中を押すことができました。さらにシフトの調整や変更には仲間たちが快く協力してくれることも伝えました。従業員の安堵の表情を見て、私は経営者と保健師という2つの道を貫いてきてよかったと思いました」と、根岸社長は表情を引き締めた。

「現在7人のがん罹患者が働いています。治療を終えてフォローの段階に入っている人、闘病真っただ中の人、さまざまですが、一人ひとりがかけがえない存在です。自分の人生を真剣に考え、自らの命を懸命に紡ごうとしている人たちに寄り添って、会社は働きながら治療できる場所であり、がんを患っても就労は継続することをみんなで確信していこうと思います」。自身もがんを克服した経験を持つ根岸社長の言葉は力強い。

会社概要

藤沢タクシー株式会社
事業内容：一般乗用旅客自動車運送事業
設立：1940年
従業員：90人
所在地：神奈川県藤沢市